

氏名	城戸 亜希子 (キド アキコ)
本籍	福岡県
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博乙第 24 号
学位授与の日付	2018 年 9 月 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	認知症の社会文化的表象について—新聞報道と小説を中心として—

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	白澤 政和
	(副査) 桜美林大学教授	長田 久雄
	桜美林大学招聘教授	柴田 博
	九州大学名誉教授	海老井 英次

## 論文審査報告書

### 論文目次

序章		1
1.	研究の背景と目的	1
2.	先行研究	3
3.	本論文の構成と概要	5
第一部	認知症をめぐる社会の変化 —新聞報道を中心として—	8
第一章	明治から昭和初期における「痴呆 (痴呆症)」	8
1.	認知症とは何か —医学領域における概念とその研究—	8

2.	辞書における「痴呆（痴呆症）」の定義と病名の一般化について	12
3.	新聞記事の分析の対象と方法	13
4.	明治期の認知症　－「痴呆」という語とその意味－	14
5.	大正から昭和初期の「痴呆」に関する報道	18
第二章	戦後の痴呆症・認知症表象　－社会意識の変化について－	21
1.	分析の目的と方法	21
2.	病名の一般化について	21
3.	社説で取り上げられた内容	22
4.	戦後の年代別問題意識の変化	26
1)	年代別記事数数の推移	26
(1)	認知症を取り上げた記事数の推移	26
(2)	他の病気に関する記事数との比較	27
(3)	投書の件数	27
2)	コーディング作業によるカテゴリー分類	28
3)	年代別問題意識、社会意識の変化	29
(1)	戦後から1970年代　－医学的観点からの啓蒙時期－	30
(2)	1980年代～1990年代後半　－家族介護の時代－	31
(3)	1990年代後半～2000年代前半　－認知症介護の社会化－	35
(4)	2004年～2007年　－若年性認知症の社会問題化－	37
(5)	2008年以降　－認知症問題の多様化－	38
第二部	認知症の社会文化的表象　－小説の分析を中心として－	41
第三章	島崎藤村『夜明け前』に描かれた「狂気」の症状	41
1.	作品と時代背景	41
2.	青山半蔵の病	43
3.	周囲の反応と心情	48
第四章	中村古峡『殻』に描かれた早発性痴呆症	53
1.	作品と時代背景	53
2.	為雄の症状とその描写	54
3.	患者を取り巻く家族と環境	59
4.	早発性痴呆症患者への治療と精神病院	66
5.	他の作品における痴呆症患者	70
第五章	非人間化される認知症高齢者　－戦後の痴呆症・認知症表象－	75
1.	丹羽文雄『厭がらせの年齢』に描かれたうめ女	75
2.	うめ女を取り巻く状況と家族の反応	80
3.	精神病院における老耄性痴呆症の母　－安岡章太郎『海辺の光景』（1959）－	85
第六章	表出される老いの恐怖　－『恍惚の人』に描かれた老人性痴呆症　－	90
1.	はじめに　－時代背景－	90
2.	認知症の恐怖と老醜のイメージ	93
3.	認知症に対する誤解	99

4.	中年期の身に迫る老いの不安	105
第七章	本人視点による認知症の自己表出 ―若年性認知症を描いた小説―	111
1.	若年性認知症をテーマとした小説の登場	111
2.	若年性認知症患者が感じる異変	116
3.	告知後の反応	119
4.	自分が壊れていく過程	127
5.	恐怖の対象 ―記憶とアイデンティティ―	136
終章	結論、残された課題	141
付録		1
謝辞		6
注		i
参考文献		i

## 論文要旨

本論文は、認知症の社会文化的表象を、第1部は明治から現在までの新聞報道を分析することで、第2部は小説を分析することで捉えることの、2部構成になっている。論文の目的は、認知症がどのような社会的文脈のなかでどのように表されてきたのかを明らかにし、認知症という病とそのイメージ、認知症を取り巻く諸課題をどのように描かれているのかを示すことにある。これをメディアや小説における表現や描写に注目しながら、認知症表象の変容、変化する社会の認知症観、そこから露呈する諸問題を明示することにある。

第1部では、明治時代から戦前までと、戦後から2014年までに分けて分析している。前者では、『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』の新聞記事で「認知症」に類するキーワードが含まれる記事を76件抽出し、当時の呼称である「認知症」の病名や用語の取り上げ方、社会的意味づけ、当時の認知症観を時代の変遷をもとに明らかにした。明治期での認知症は、奇病や狂気の病として扱われ、明治初期には「あほう、ばか」と揶揄する意味での使用から、後期には早発性痴呆と麻痺性痴呆として用いられ、全体として、老耄、惚け、発狂、気が変になる、という用語が使われていた。大正から昭和初期の報道では、認知症を異常な病としてのイメージを強めていき、狂人、狂気、怪奇といった表現がされ、認知症の人への社会的疎外へと移行していった。

後者の戦後については、2014年までの『朝日新聞』のデータベースをもとに、「老人ぼけ」「痴呆」「認知症」「アルツハイマー」のいずれかを含め記事1631件について、テキストマイニングで分析をした。記事数は2007年に一度ピークを迎え、さらに、2008年から増加傾向が続いている。戦後の記事内容を分析する中で、1970年代までの医学的観点からの啓蒙時期、1980年から1990年代後半での家族介護の時期、1990年後半から2000年半ばからの認知症介護の社会化の時期、2000年半ばから2010年を若年性認知症の社会問題化の時期、2010年以降を、認知症は身近なもので、認知症

の人も出来ることがあり、地域ネットワークへの関心が高まる認知症問題多様化の時期、と整理している。

第2部では、認知症に関わる小説を対象に、認知症症状の描写に注目し、認知症に対する意味づけや認知症を取り巻く諸課題を導き出している。戦前までについては、島崎藤村の『夜明け前』に描かれた青山半蔵と、中村古峯の『殻』での為雄の症状を取り上げている。

戦後については、丹羽文雄『厭がらせの年齢』でのうめ女、安岡章太郎の『海辺の光景』での信太郎の母、有吉佐和子の『恍惚の人』での立花茂造をもとに、認知症の捉え方を分析している。1980年以降では、吉目木晴彦『寂寥郊野』と佐江衆一『黄昏』を取り上げ、若年性認知症に特化して夏樹静子『白愁のとき』、萩原浩『明日の記憶』、リサ・ジュノバ『アリスのまままで』を取り上げている。

とりわけ、認知症について社会に衝撃を与えた『恍惚の人』は、認知症の老醜と恐怖のイメージを演出し、認知症の人は何もわからない迷惑な存在ということから、老醜への嫌悪感を喚起するものであった。これを、同時期に刊行された井上靖の『月の光』での認知症を老いの一部であり、ごく自然な姿として描いていることと、対比して分析している。『恍惚の人』以降、認知症を取り上げる小説が増加していくが、家族介護における介護者側の深い心理的葛藤を描いており、家族の結束を強くしている側面と家族を崩壊させていく側面が捉えられている。同時に、認知症の人自身の記憶を失うことの苦悩や自己と記憶の関係が描き出されてきている。

以上から、明治から戦前までを、認知症を精神の狂気から老人性痴呆と移行し、周囲にとって忌まわしい存在として位置づけられていたが、戦後については、「痴呆症」から「認知症」へ変化する中で、否定的な認識から、社会問題として認知症を捉え、介護問題がテーマに捉えられ、認知症の人へのポジティブな表現へと変化してきたと、結論づけている。

## 論文審査要旨

本論文は、認知症に関する新聞記事や小説での表現や描写をもとに、認知症に対するイメージ、認知症を取り巻く諸課題を取り上げ、認知症表象の変容、変化する社会の認知症観、そこから露呈する諸課題を明示することを目的にしたものであるが、それらについて膨大な資料を分析し、明確化したことが評価できる。同時に、認知症という病気を社会文化的表象として捉え、それが国民や制度にどのように影響を与えていったかを詳細に捉えていることで、認知症の概念に広がりをもたらすことを可能にした。このような文学的な視点での認知症への接近は斬新で未確立の分野であり、今後の老年学研究に大きく寄与できるものである。よって、本論文は、博士（老年学）の学位に相当するものと、審査委員全員が結論に達した。

## 口頭審査要旨

公開による最終試問を7月9日に実施したが、決められた時間を使って、本論文の内容を時間通りに報告された。また、審査委員をはじめ多くの参加者からの質問に対して、適格かつ丁寧に返答していた。特に、審査委員からのコメントに対して、体験型の小説は自らの観察体験に基づくものであり、認知症の人や家族の個性や生活状況など様々な要素が関与し、認知症についての知識を超えて捉えることができる可能性があるが、そうした小説特有の虚構の世界にまで広がることの問題があることを考慮することが、今後研究を深めていくうえで重要であることを表明された。以上の結果、口頭審査についても、審査委員全員が、博士（老年学）の学位について、合とした。